

京都モノがたり— ⑭

京都に歴史を刻み、洗練を極めてきた京の銘品の数々。伝統工芸にかかれた物語をご紹介します。

白竹で編んだ風鈴は京都の摺師・竹中木版「竹笹堂」とのコラボ商品。伝統工芸同士がタッグを組み、若い人へも発信している。

京銘竹・京竹工芸

まるで工芸品のように、光を帯びて美しい竹肌を持つ一本の白竹^{しらたけ}。たけのこが軟らかいうちに木杵をはめて育て、特殊な薬剤で模様を付けて四角く育てた図面角竹^{ずめんかくちく}。生きた竹の上部を伐採して半枯れ状態にすることで趣のある胡麻状の斑点を出し、茶道具などに用いられる錆竹^{さびだけ}、もうそうちく^{もうそうちく}。孟宗竹の突然変異で亀の甲羅のような形になり国民的時代劇の水戸黄門が持っている杖にも使われている亀甲竹^{きっこうだけ}。これらはすべて「京銘竹」といわれ、京都特有のものである。

盆地で寒暖差が大きい京都は、昔から竹の産地として有名だった。平安時代には既に中国からもたらされた竹が育てられていたといわれており、現在は長岡京市や京都市西京区などが京銘竹の産地だ。

京銘竹は美しく趣があることで知られているが、風土に恵まれていること以外にも理由がある。多くの伝統工芸が寺社仏閣と共に在るように、京銘竹はなかでも気品を重んじる茶道、華道の文化に育まれ

研鑽を積んできた。数寄屋建築、茶室の炉縁や天井、床柱や花筒…… あらゆるところに用いられ、文化と共に発展してきたのである。

手間暇をかけてつくる白竹

京銘竹の中でもよく目にするのは白竹。「火炙り」の技法が用いられている、特徴的なものだ。

白竹づくりはまず、10～11月に伐採するところから始まる。この時期、竹の成長が止まるため養分が少なくなり、それに伴い虫も少ないため一年分の竹を伐採してしまう。伐採した竹は、そのまま竹林の日陰で2か月ほど寝かしておき水分を抜く。1月に入った頃には竹の水分量が落ちてくるので、工房へ持ち帰り「火炙り」作業へ。竹は火でじっくり炙ると、中から油分がじわりと滲み出てくるので、ムラにならないように一本ずついねいにふき取っていく。1月の間は連日「火炙り」の工程が行なわれ、2



京銘竹の4つ。手前から鑄竹、亀甲竹、図面角竹、白竹。
京銘竹それぞれに趣があり、用途も異なる。



火炙りの作業は熱さとの戦い。根気よく、ていねいに油をふき取っていく。



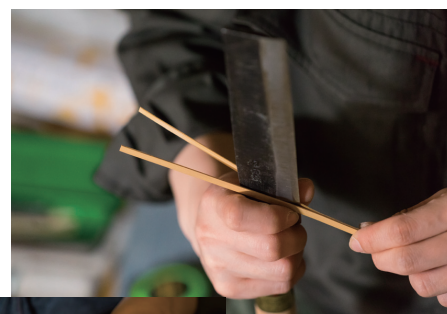
白竹を使った、やたら編みの椅子はオブジェのようなフォルム。しなやかなすわり心地で、実用性にも優れている。



一本の竹を割る道具は菊割と呼ばれる鋳物を使用。3等分、5等分など割りたい数に合わせて使い分けている。



犬矢来の目的は諸説あるが、基本は町家の腰板が雨などで傷まないようにするため。景観を守るためにも欠かせない。



一本の竹をひご状に割っていくには、熟練の技が必要。編む技術より修得が難しいといわれる。

月になればゆるやかな日の光で2週間ほど天日干しを行なう。すると竹は徐々に色が変わりはじめ、やがて美しい鉛色の竹肌が生まれる。4か月を経て出来上がった白竹は、内装材や建材、工芸品などに姿を変えていく。

美意識に訴えかける竹を

白竹が使われているものの一つに「犬矢来^{いぬやらい}」がある。犬矢来とは町家の軒先にある、ゆるやかなカーブを描いた垣根。祇園町をはじめ、町なかで目にすることが多いこれこそ、美にこだわる京都らしい白竹の使い方。家の顔ともいべき玄関横に設置されるため、白竹の中でも傷一つないものが選りすぐられている。十年に一度取り換える消耗品にも、美しさを追求しているのだ。

「最近では収納機能を持たせた犬矢来の依頼も多い」と話すのは、大正12年創業、横山竹材店の横山裕樹

さん。年間50台以上の犬矢来を取替え、建築内外装材、工芸品とあらゆる竹製品を手がけている。「京銘竹をつくる技術はもちろんですが、一本の竹を均一に割ってひご状にしたり、編んだりする技術も難しい」と語る。京銘竹を用いる数寄屋建築や茶室の仕事は昔に比べて減ってはいるが、それ以外に飲食店の内装や照明など新たな竹の需要も生まれているという。

6月、京町家はしつらえを夏障子やすだれ、網代に衣替えをする。ここに一筋の風が入り風鈴の音が聞こえると、なんとも涼やか。竹は蒸し暑い京都をさわやかにしてくれる、古くからの京都人の知恵なのだ。しかし、文化や風習に甘んじていては京銘竹、京竹工芸の未来は厳しい。「竹は無くても困るものではありません。それでも必要だと思ってもらえるように、美しく機能的でなければならない」。美意識に訴えかける京銘竹、京竹工芸の今後が楽しみである。

(取材協力：横山竹材店) <http://www.yokotake.co.jp/>